

「不信と憎しみのただ中で」
ヨハネによる福音書 7章1～9節

なんのために生きるのか
わからないときにも
生きなければ 生きなければ
主に生かされているのだから
主に生かされているのだから
行くさきはどこなのか
わからない道でも
行かなければ 行かなければ
主が先に行かれたのだから
主が先に行かれたのだから
いつわりをいう人や
かたくなな人をも
愛さなければ 愛さなければ
主に愛されているのだから
主に愛されているのだから

「主に愛されて」という、^{みずのげんぞう}水野源三さんの詩です。水野さんはすでに亡くなられましたが（1984年、47歳）、心の思いを飾らぬ言葉で文字にされ、信仰の詩を数多く^{のこ}遺されました。それらは神に呼びかけ、神と語り合う素朴なもので、その真つすぐな詩風は今なお読む者の心を打ち、内に染み入る美しさを持ち続けています。詩集を長く愛読されている方々も多いのではないのでしょうか。

水野さんは小学校4年のとき^{かか}集団赤痢に罹り、それがもとで^{しょうにまひ}脳性小児麻痺にみまわれました。手足は利かず、ものも言えない。残されたのはただ、^{まぼた}瞬きをすることだけでした。ですが、その瞬きで壁に貼られた「あいうえおの50音表」を追い、そこから多くの詩を生み出されました。それは、苦しいなかにあっても 悲しいなかにあっても、私たちはなお イエス・キリストの^{まなざし}眼差しに包まれ、そこで生かされている。主イエスに愛されている、と^{うた}詠うものです。今月は7章の冒頭が聖書の箇所ですが、いつもと少しばかり^{おもむき}趣を変え、この^{まぼた}瞬きの詩人・水野源三さんの詩に心を重ねつつ、聖書の語りかけに聴いていきたいと思います。

時は2節、「ユダヤ人の^{かりいおさい}仮庵祭が近づいていた」頃でした。ユダヤには、年ごとにもたれる

大きな祭りが3つありました。過越祭^{すぎこしさい}と五旬祭^{ごじゅんさい}、そして今回の仮庵祭です。この仮庵祭については、あまり馴染みがないかもしれません。がしかし、新約時代のユダヤ人は、祭りと言えば、仮庵祭のことをまず思い浮かべたとされています。仮庵祭の「仮庵」とは、「仮の小屋」という意味です。すなわち、イスラエルの民が奴隷の地・エジプトを脱出して40年の間、荒れ野を彷徨^{さまよ}ったとき、その荒れ野で設けた「仮の宿」を象徴するものでした。それはほかでもない、自分たちは誰の御手^{みて}によって支えられてきたのか、また支えられているのか、というそのことを歴史を通して振り返り、それを信仰の事実として確認することでした。こうして、ユダヤの人々は仮庵祭の期間、木の枝や葉で仮の小屋を造り、その中で生活をしました。家の屋上に造る人もいれば、中庭に造る人もいました。あるいは、家の入り口を囲むようにして、これを造る人もいたといひます。折しも、時はローマ帝国の支配下にありました。祖国を占領され、苦悩のなか、不自由な時を過ごしていました。であればこそ、そうしたなかであって、荒れ野を放浪した先祖のことをことさら近く、また強く思い起こしたのではないのでしょうか。神の支えと導きとを、彼らと同じように祈り求めたのではないか。「放浪の時を終わらせてください。定まらない人生の流浪^{るろう}を終わらせてください。そして、荒れ野を突き抜けさせてください」と祈り求めていたのではないか。そう思われてなりません。

ところが、です。そうした祭りとは裏腹に、しかし、イエス・キリストを取り巻く空気は緊迫の度を増しつつありました。1節に、「その後、イエスはガリラヤを巡^{のち}っておられた。ユダヤ人が殺そうとねらっていたので、ユダヤを巡ろうとは思われなかった」とあるとおりです。エルサレムのユダヤ教関係者を中心にして、主イエスを亡き者にしようとする殺意が膨らんでいました。イエスの出現によって、我々の求心力が脅かされかねない。しかも、イエスは自分たちを真っ向から批判する。これまで築いてきた宗教体制や既得権を崩すようなことさえ口にする。民衆に害毒を撒き散らし、我々の立っている足もとを揺すぶる男だ。そのようにユダヤ教の指導者たちは感じ、危機感をつのらせていたのではないのでしょうか。

イエス・キリストはいつの時も、常に、一人^{ひとり}ひとりを大切にされました。それぞれをかけがえのない一人として、何よりも大事にされました。だからこそ、そのひとりの尊厳が侵され、そのいのちが好い加減^{いかげん}に扱われて壊されていくとき、主イエスは神の愛をもってそれを回復し、取り戻そうとされました。プライベートだとか社会だとか、そこにそうした区分は見られません。あるのはただ一つ、一人の人に注がれ、そのいのちを愛おしむ慈しみの眼差し^{まなざし}です。そもその精神が置き去りにされ、外側の形式ばかりに偏っていた当時の宗教情況。そのようにして、あるべきいのちに薄く、人を生かすことに遠くなっていた当時の宗教者たち。その有りようを主イエスは取り上げ、それを本来の、人をいのちに生かす有りようへと回復しようとしたのでした。これに対し、ユダヤ教の指導者たちは「イエスは自分を神と等しい者としている。とんでもない冒瀆^{ぼうとく}だ。死罪に値する」と言って、主イエスを非難し、告発しました(ヨハネ5:18他)。そして、これを理由に、主イエスを亡き者にしようと図りました。たしかに、それが彼らの挙げた理由でした。しかし、それがはたして、事のすべてだったのか。より深いその奥や裏に、そうした表向きのもの言いを後押しす

る隠れた思いはなかったか。そんなふうに思われてなりません。底の底の所にあった本音のそれと言えるでしょうか。それはいったい、どんなものだったでしょう。もしかするとそれは、誰の内にもしばしば垣間見られる、抜けがたい自意識だったかも。あるいは、何かにつけ頭をもたげる、人気や世評の優劣感だったかも。さらには、それらとどこかで無縁でない自己顕示や権力欲の願望であったり、そこから生まれる妬みの構造であったり・・・。その詳細は定かでないものの、しかしおそらく、次のことは言えるように思うのですが、いかがでしょうか。それは、神の御心を身をもって生き、示そうとされたイエス・キリスト。その主イエスを邪魔に思い、これを葬ろうとするところ。そこに潜むのは、「主なる神」を慕う思いではなく、「私なる神」を愛するそれなのではないか、ということです。それは実際、私たち人間に根深く巣くう習性のようにも感じられますが、だからこそことさら、そうした誘惑に陥らないよう心していいたいと思わされます。誘惑にはまってイエス・キリストを脇にやり、そのようにして主イエスを亡き者にすることがないよう、そして自分が主イエスに取って代わることがないよう、くれぐれも注意したいと思わされます。

話は続きます。主イエスはユダヤの宗教者らに狙われていただけではありません。ヨハネの記述によれば、どうやら、兄弟たちまでもが主イエスに良い感情を抱いていなかったように見受けられます。3節、4節に、こう記されています。「イエスの兄弟たちが言った。『ここを去ってユダヤに行き、あなたのしている業を弟子たちにも見せてやりなさい。公に知られようとしながら、ひそかに行動するような人はいない。こういうことをしているからには、自分を世にはっきり示しなさい』」。ここで言う「弟子たち」とは12弟子のことではなく、広い意味での一般的な信奉者や同調者たちのことですが、この時点では兄弟たちもまた、主イエスの言動をまともに受け止めているようには見えません。むしろ、訝しく思っているような印象を受けます。どこか冷ややかで、皮肉を含んだ嫌みさえ感じられないでしょうか。もっと言うなら、挑発にも似た棘のようなもので感じられるのではないのでしょうか。私たちが様々な所で耳にする、あの言い方です。「あれだけ言うんだから、やってもらいましょ。お手並み拝見といきましょうよ」。兄弟たちのそんな下心を明かすかのように、ヨハネの福音書は記しています。5節です。「兄弟たちも、イエスを信じていなかったのである」。近くあることがかえって人の目を曇らせるというのは、必ずしも珍しいことではないように思われます。身近な人間のあれこれを思い込みや決めつけの色眼鏡なしに見て、聞いて、理解すること。そのようにして、事柄を事柄として受け止めるというのはそう容易ではないようです。何がその妨げになるのでしょうか。異質なものに違和感を憶えさせる、家族同士の似た者意識か。それとも、それが故に生まれる競争心ややっかみか。それが何であれいずれにせよ、私たちはここでもまた教えられるのではないのでしょうか。大切なことを見て取れる、そのような目を持たねばならないことを。大事なことを聴き取れる、そのような耳を持たねばならないことを。事柄を事柄として受け止める、囚われのない心です。そうした真つすぐで素直な心を持って、イエス・キリストの下さるそのいのちにあずかれたらと思わされます。

このような兄弟たちの言葉に対し、主イエスはしかし、次のように答えられます。「わたしの時

はまだ来ていない」(6)。ここで「時」という言い回しに用いられている言葉 (^{カイロス}καῖρός < ^{カイロス}καῖρός, oũ, ó) は、(新約聖書の) 原語のギリシア語では、単なる時間の経過を表わすそれ (^{クロノス}χρόνος, ou, ó) ではありません。日常のそれではなく、ある「特定の時」を意味する語です。丁度良い時、適切な時、的確な時などといった意味での、定まった もしくは定められた特別な時を意味します。このことは、ここでは重要な意味合いを持っています。つまり、これによって ほかでもない、「十字架の時」が意味されているからです。それは ここでは神の時とも言えるもので、私たちが自身の都合で決めた時ではありません。神の御旨が満たされる時、これを全うすべき時、そのようにして自らの使命を果たすべき時、と イエス・キリストが認識し、身をもって それを受け止められた時です。すなわち、主イエスが十字架についてくださった時であり、そこにおいて、神がその御手を広げて 私たちを包み込んでくださった時です。さらに言うなら、神の愛がこの世に熱く鋭く分け入り、私たちに救いを示してくださった時と言えるでしょうか。そのようにして、生けるいのちへと この私たちを招き入れてくださった時です。そうした時は 実際、私たちが求める都合の良いときに、私たちの予定や思わくに合わせてもたらされるものではありません。それは それこそ、神御自身が決められ、そして、私たちの思いを超えたところで 一人ひとりをうれしいいのちへと生かすものではないでしょうか。主イエスは言われます。6 節、「あなたがたの時は いつも備えられている」。兄弟たちは好きな時に、好きな所へ行くことができました。ですから、主イエスは 8 節で続けて言われます。「あなたがたは祭りに上^{のぼ}って行くがよい」。けれども、私たちは「時」というそのことに いつも、良い感性を持っていたいと思わされます。そこには特別な時が置かれているかもしれませんし、それはもしかすると、神の時であることも・・・。時を見分ける目の、また時を受け入れる信仰の大切さを思わされます。

「ヒヤシンスよ」

寒さがぶりかえし
北風が吹き出し
雪が降り出すから
ヒヤシンスよ
まだ芽を出すな
神様が
定められた
その時まで
静かに待てよ

「わたしはこの祭りには上^{のぼ}って行かない。まだ、わたしの時が来ていないからである」(8)。イエス・キリストは 8 節で、いま一度 繰り返して、このように言われます。実際には、主イエスはある理由から「人目を避け、隠れるようにして [祭りに] 上^{のぼ}って行かれ」るのです

が(7:10)、これはつまりは こういうことではないでしょうか。すなわち、町々村々を巡って 神の愛を説き、それを身をもって生きられたイエス・キリストです。であれば、それは何よりもまず、それをするに足る しかるべき時間が求められる、ということです。飼う者のない羊のような人々。助けを求め るいと小さき者たち。愛と慈しみに渴く 孤独な人たち。そうした人々への熱い思いが主イエスをそのところへと近く親しく向かわせます。そのための時間がまだまだ必要なのだ。そのようにして、神の愛を広く分かち その時間が。私の(十字架の)時はまだ来ていない。そう、主イエスはまずもって言わんとされたのではないのでしょうか。

ただ、それと同時に もう一つ 思わされるところがあるのですが、いかが思われるのでしょうか。それは、こうしたイエス・キリストの生き様と裏腹に、あと一つ 重要なこととして、私たち人間の側に露わになることがある。主イエスを厄介に思い、これを葬ろうとする。そして、十字架に追いやる。積極的に主導して、あるいは黙して追従して、ということです。当時の宗教体制のもと、顧みられることがなく、負荷と抑圧の中にさえあった人たちがいて、そうした人々に 主イエスが近くあろうとしたのもその一因と言えるでしょう。それ以外のあれやこれやもあり、そんな現実を知るにつけ、考えさせられます。人は何が原因で、イエス・キリストを十字架に追いやるのか。人の何が主イエスを嫌わせ、これを葬ろうとさせるのか。人間はなぜ、主イエスに敵するのか、と。つまり、私たち人間とイエス・キリストのそうした相違の事実と本質が誤解なく明確になるまでは、主イエスは最期の火中に身を投じることはされなかったのではないかと、ということです。神の真実と人の偽り、光なる神の真理と闇を帯びた人間の虚実、愛の神と利害の人間等々・・・といった、それらの事実とその本質です。人々がこれらの現実を実際に目にして 事の有りようを身をもって知るまでは、主イエスは十字架に上ることをされなかったのではないのでしょうか。そうでなければ、私たちは結局、問題の所在もその本質も何も理解しないままに終わってしまいます。何にも気づかず、何も変わることもなく、ただそのままに・・・。だとしたら、神の愛の「あ」の字も神の恵みの「め」の字も分からぬまま、私たちはまたしても、自分という 出口のない迷路の中をぐるぐる回りすることでしょう。その現実を詳らかにし、自らの外にこそ そこから出る出口があることを示すべき時。その時が来るまでは、主イエスは十字架に上るわけにはいかなかったのではないかと、そう思わされています。「わたしの時」の、もう一つの側面です。

がしかし、そうであればこそまた、その時が来たとき、すなわち これらの二つの時が満ちたとき、イエス・キリストはそれを神の時として、なすべき業をその身に引き受けられたのだらうと思えます。そのようにして、愛する私たちのすべてを身に負い、慈しみの十字架を背負って、主イエスはカルバリの丘へと歩まれた。そして、エルサレムの丘の上に立たれたのではないのでしょうか。

「聞こえる」

窓ガラスを
うちたたく
北風の音に

何度も
たおれて
カルバリの丘へ
歩み行かれた
イエス様の
はげしい
息づかいが

だとしたら、イエス・キリストを十字架に追いやったものとは いったい、何なのでしょう。それは、と 主イエスは言われます。「世はあなたがたを憎むことができないが、わたしを憎んでいる」(7)、その憎しみだと言われます。今回の 7 章の冒頭には、私たちの内に戸惑いを引き起こす言葉が一つならず出てきます。主イエスに対する兄弟の皮肉もそうですが、この言葉もそうではないでしょうか。なぜなら、私たちはしばしば、互いに対して良くない思いを抱くからです。表立ってそうすることもあれば、陰で隠れて囁くこともあります。ところが、主イエスは「世はあなたがたを憎むことができない」と言われます。どういうことなのでしょう。俗っぽすぎて、少々 気が引けなくもないのですが、佐高信 という評論家を御存じでしょうか。だいぶ前、激辛の評論で名を響かせましたが、その佐高さんが時のビートたけし（本名 北野武）を評して、挑発的とも言える一文を記したことがあります。今や世界的な映画監督ともなった北野さんですが、当時は、際どい物言いや過激なパフォーマンスで 何かと世間を騒がせていました。佐高さんの文章は 毒舌の芸能人とも言われたその頃のビートたけしを評したもので、次のような一文です。激辛と毒舌の衝突ですが、主イエスの真意を考えるうえで一つの参考になるように思われます。いかがでしょうか。

〔私は〕 ビートたけしを「時代のタイコモチ」と批判した。あれは毒舌でも何でもなく、タイコモチがダンナの肩をポンと叩いて、「ダンナ、それはひどいでげすよ」と言っている程度のものだ、と切り捨てたのである。危険性がないから、たけしの『だから私は嫌われる』は売れに売れ、六十万部を突破したとか。たけしは、野村証券や住友銀行を スキャンダルが発覚する前に批判したことはないし、彼のしゃべりに体制を揺るがすような毒はない。

・・・カゲキに見えるのは・・・猥雑な言葉が乱発されている部分だけ。要するに下ネタのみの危険性であり、たけしの「上半身」はまったく危険ではない。

たけしは・・・汚濁の泥の中ではねるムツゴロウのようなものなのだ・・・。

つまり、ここまでは安全、と 危険の及ばぬ安全圏をちゃんと心得ていて、その中でいくら毒舌を装っても、それは結局のところ、本質的には見せかけのそれであり、危険性のない 安全な人気取りにすぎないと言うわけです。

もう少し 聖書に関係した例を御紹介しましょう。クラレンス・ジョーダン (Clarence Jordan) という、アメリカの南部バプテストの牧師の逸話です。オーバーオールのの聖人ともブルージーンズの預言者とも呼ばれた牧師ですが、学者としても優れた才能を持ち、とりわけギリシア語に堪能な新約聖書の学者でもありました。しかし、その名が知られたのは、神学校を卒業後、ジョージア州で「コイノニアファーム」という共同農場を開いたことによります。それは人種の偏見を克服する分かち合いの農場で、黒人も白人も共に助け合って生きることでイエス・キリストの「山上の説教」を現実のものにしようとしたものでした。ですが、時代は1940年代。公民権法が成立する(1964年)ずっと以前で、人種的な偏見や差別が激然と力を持っていました。黒人と一緒に、ということは、そうする白人の上にも迫害や危険が及ぶことを意味しました。しかし、ジョーダンはプロジェクトを諦めません。そして、そんななかでのことでした。ジョーダンは実の兄弟の一人に、農場の法的代理人になってくれないかと頼みます。その兄弟は当時 弁護士で、後に州の上院議員になり、さらには州の最高裁判所の長官にまでなった人物です。ところが、ジョーダンの期待は叶いません。依頼を断られたのです。政治的な野心を持った兄弟は、農場に関わることで自身の出世が危うくなると感じたからでした。そのときです。次のようなやり取りがふたりの間で交わされます。それはどこか衝撃的とも言えるもので、生来の人間の本质ということについて多くを考えさせられたのを覚えています。

ジョーダンは言います。

「ふたりがバプテスマを受けて、教会に加わったとき、牧師は同じ質問をしたよね。『イエス・キリストをあなたの救い主として受け入れますか』。ぼくは『はい』って答えたけど、何て答えた？」

答えが返ります。

「クラレンス。ぼくだって、あるところまでは 主イエスに従うよ」

再び、ジョーダンが尋ねます。

「あるところまでって、十字架のところまでだろ」

そのときでした。人間の底に潜む否定しがたい本心が兄弟の口を突いて出たのでした。

「そのとおりだよ。十字架のところまで、ぼくは従っていくよ。でもね、十字架の上には上らない。十字架につけられるのは嫌だよ」

こうして、ジョーダンの依頼は拒まれました。

しかしながら、時を経て、この兄弟はその言葉を撤回し、次のように告白するまでに なったと いいます。

「クラレンスは、自分が出会った 最高のクリスチャンでした。その兄弟に生まれたことを、自分は何よりも誇りに思っています」

とはいうものの、この兄弟がこのとき口にした言葉は、いかに上手に繕ってもやはり、私たちの

心の奥底に横たわる本音の言葉ではなかろうかと思わされます。利己を捨て、私心を去って、保身や思わくの無い自分になる。そして、「善い」を「善い」と言い、「悪い」を「悪い」と言って

(7)、しかるべき道に生きることができるか。そのようにして、愛に生き、隣り人を生かし、神と人との仕えることができるか。そう問いかけて 自分自身を振り返るとき、根っこの部分で、どうにもそうならない自分を見させられます。外側を繕うことは、それでも それなりにできるかもしれません。善意の装いでそうすれば・・・。しかし、本当にそうなり切るのは、どう考えても無理なように思われます。私たちは、何がどうあれ 結局、それぞれの安全圏で体裁をつけることしかできないのではないかと。神を愛し、人を愛し、正しきを愛する、そのような私欲や保身の無い心で十字架に上ることはできない。その意味では、私たちは誰もが似た者同士で、詰まるところ、同じ穴の貉と言わざるをえないのかもしれませんが。だとしたら、私たち・この世の人々は、主イエスを厄介に感じて憎むようには、互いに憎み合うことはないのだらうと思います。実際、ユダヤの人たちはどうだったのでしょうか。彼らも結局は、そのようにして、「イエスを十字架に！」と 口を揃えて合唱し、主イエスを丘の上へと追いやったのでした。声に出しては叫ばないものの、— これもまた、もう一つの保身でしょうか— 少なからずいたはずの、黙したまま その合唱に迎合した人々も含めて。

しかしながら、イエス・キリストはこれに対し、そうでない生涯を生き抜かれ、そして 7 節、「世の行っている業は悪いと証し」されたのでした。私たちの善くない有りようを指摘されました。そこに潜む、善からざるものを。それは もちろん、私たちを裁いて葬るためではなく、善きところへと私たちを導き、そこで 私たちを真のいのちに生かすためだったにちがひありません。とはいえ、自らの有りようを問われ、そこに潜む善からぬ性質を指摘されるこの世は、またこの私たちは それをどう感じるのでしょうか。そうする主イエスを良くは思わず、疎ましく思うのではないのでしょうか。憎しみすら抱くかもしれません。表立ってそうはしなくとも、密かにそう思って、心の内で主イエスを無視し、そのようにして 主イエスを亡き者にしていくかもしれない。そのことに、主イエスの兄弟たちは気づかずにいたようです。もしかすると、私たちにも それぞれだけ見えているのか、それほど定かでないのかもしれませんが。ですが、それが見えない間は、見えて 多少なりとも分かるようになるまでは、信仰というものは本当は、あまりよくは分からずにあり続けるのではないかと。そのようにも思われます。

イエス・キリストはこうして、自らの安全圏に留まることをされませんでした。自身の安全を第一とすることはせず、十字架の死の影を負いつつ、歩むべき道に進み続けられました。それは、自らのすべてを懸けた、文字どおり 体を張って生き抜かれた生涯と言えるのではないのでしょうか。命をも賭して十字架へと向かい、欠けの多い私たちのすべてをその身に負って、そこに上ってくださいました。そのようにして、御自身のすべてを注ぎ出し、生けるいのちの在り処を示して、そこへとこの私たちを招いてくださいました。それは実際、至らぬこの私たちにとって、救いと言わずに何とも言えるのでしょうか。感謝と喜びの原点が主イエスによって備えられてあることをうれしく感じています。

「知れば知るほど」

み愛を知れば知るほど

わがつめたさを知る

み力を知れば知るほど

わが弱さを知る

み恵みを知れば知るほど

わがいやしさを知る

主を知れば知るほど

わが喜びが楽しくふくらむ

実際、しばしば耳にし、また時に自分でも口にする言葉に こんな ^{つぶや} 呟きがないでしょうか。自分はクリスチャンなんだけど、そうは言っても どうも ^{うそ} 嘘っぽいところがあつて、なかなかそうも言い切れない自分があるんだ、などと。すなわち、信仰がないわけではないけれど、それと裏腹な自分も抜けがたくいて、クリスチャンらしくあろうとすればするほど、本当はそうでない自分が目についてしまう。そんな自分をどうにも持て余して、というわけです。誰にも思い当たるふしがあるように思われますが、では、嘘っぽい後ろめたさなしに「クリスチャンである」と言うためにはどうすればいいのでしょうか。言い換えるなら、私たちがクリスチャンとされるのは はたして、どんなになったときなののでしょうか。

それは、一つの言い方として、世がイエス・キリストを憎んでいることを理解したときではないか。世が、すなわちこの自分が底の底において、本当は 主イエスをそんなには喜んで受け止めていないという そのことに気づき、その事実を受け入れたときではないか。そんなふうと思わされもするのですが、いかがでしょうか。それは、言葉を換えれば、そのようにして自分自身に途方に暮れたとき、ということです。そして、その途方が深ければ深いほど、イエス・キリストというお方の存在が近くなり、その御手が大きくなるように思われます。なぜなら、そこに伸べられている御手は温かく、慈しみに満ちていて、私たちの欠けや至らなさを包んで余りあるからです。「だからこそ、私はあなたの そのところにいるのだ」と、そう声をかけてくださる主の御手だからです。

逆に言えば、わずかばかりの立派さを見つけては、自分もこれだけクリスチャンらしくなった、と ^{こころひそ} 心密かに誇らしげに思う。そんなとき 実は、私たちは反対に、クリスチャンであることから遠ざかっているのかもしれませんが。悔い改めや謙虚ささえ、自分の立派さにしてしまう私たちです。そのようにして、落とし穴はそこここに潜んで、私たちが待ち受けているのではないのでしょうか。誇りうるものは、私たちにはない。誇るべきものは、私たちにはないように思われます。ただ恵みによって、ただ ^{ゆる} 赦しによって、イエス・キリストのいのちにあずからせていただく。主のものとしていただく。それがクリスチャンというものではないのでしょうか。自分はクリスチャンだ、と 自信深げに言うのではなく、「あなたは 私のものだ」と 主イエスが言ってくださるそのところで、私たちがクリスチャンとされるのだらうと思います。そして そのとき、私たちはもはや、イエス・キリストに背

を向けることができなくなるのではないのでしょうか。主イエスの恵みに包まれ、その中へと引き寄せられていくからです。

「この世では」

きびしい冬を

耐えしのび

生きつづけて来たのに

花を咲かせなければ

引きぬいて

ふみにじるような

この世では

主イエス様の

愛を

知らなかったら

どうして

生きて行けようか

イエス・キリストは、この世の姿を明かされました。そして、それがため、世に憎まれる者となりました。信仰とは諦めでもなければ甘えでもなく、ましてや軟弱な弱さなどではないでしょう。それは、この世の現実の姿を、つまりこの私たちの現実の姿を知って、それを自らの事柄として見据えることであり、しかも、そこに依然として伸べられているその神の恵みの御手に感謝をすることではないのでしょうか。そのような信頼の内に身を置くことができたなら、私たちもまた、主イエスのいのちにあずかり、生けるいのちに生かされていくように思われます。優しさや柔らかさもそこで育まれ、そこで本物の強さが与えられるのではないのでしょうか。そしてそのとき、不信と憎しみのただ中にあってもなお、それらに勝って善きものを生み出す力を与えられると教えられます。

「かぎりある命を」

御恵みを感謝し

御愛をたたえて

美しい声で鳴く

涼しい窓への

ハタオリムシは

神様から

与えられた

かぎりある命を

悲しみもせず
なげきもせず
恨みもせず

〔祈り〕

愛する神様。

^{みずか}自らの至らなさを知り、その深みから あなたの慈しみと救いを祈り求める者。そのような者に、私たちをならせてください。ポーズではなく、心からそうする者と、私たちをならせてください。

私たちの足りなさに勝^{まさ}って 豊かな恵みを下さる、慈しみの神様。

あなたが私たちを顧み、生けるいのちに生かして下さることを信じて、感謝いたします。

そのあなたを密^{ひそ}かに、心の隅や奥^{うと}で疎むことはありませんように。十字架の上から注がれている御子イエス・キリストの眼差しから、目を背けることはありませんように。頑^{かたく}々な囚われから 私たちの心を繰り返し解き放ち、素直で素朴な思いで満たしてください。

いついかなる時も、私たちを御手^{みて}の内に置き、御心^{みこころ}をもって伴ってくださいますように。

御子イエス・キリストの御名^{みな}によって願い、お祈りいたします。

アーメン